

学術論文

日本の幼稚園創設期における保育者養成  
- 「幼稚園保姆」を養成した人物と場所に注目して -

青山 佳代

The Childcare Training Process  
at the Dawn of Kindergarten  
in Japan  
: With Special Reference to the Portrait and Location  
to Train Kindergarten Teachers

AOYAMA Kayo

はじめに

本論文は、わが国の幼稚園創設期における保育者<sup>1</sup>養成について考察するものである。その当時、幼稚園で保育を行う者を「幼稚園保姆」と呼称していたが、その養成制度・機関は十分に確立されていなかったようである<sup>2</sup>。幼稚園保姆という職種に対して、人々は単なる「子守」と同視しており、学校などの機関で幼稚園保姆を養成することなど真剣には考えられていなかったからである。

宍戸健夫や津守真といった、日本における幼児教育の歴史に関する著名な研究者とともに名を連ねる水野浩志（1983）も、「わが国の保育者養成の歴史は古く、100年以上を経過しているが、長い間、政府の放任無策のままに、私人の並々ならぬ努力と献身のおかげで、かろうじて保育者の需要にこたえてきた<sup>3</sup>」と述べている。日本においては第二次世界大戦後の新教育体制下において幼稚園教員養成ならびに保育所保母（=現在の保育士）養成が制度化され、初めて本格的・組織的な保育者養成が行われるようになったと考えられている。

とはいえ、明治12年にはわが国初の保育者養成機関として、東京女子師範学校保姆練習科が開設されている。そこで、本論文では、幼稚園創設期における保育者養成の様相についての考察を試みる。東京女子師範学校附属幼稚園の開設から、しだいに幼稚園の数が増えていくなかで需要が高まってきた幼稚園保姆がどのようにして養成されていたのかを明らかにしたい。また、どのような人物や場所を中心として幼稚園保姆の養成が行われていたかにも注目していきたい。

なお、本論文では、昭和31年に日本保育学会で組織された共同研究小委員会が『幼児の教育』

で発表してきた「日本幼児教育史の研究」での研究成果を中心に分析を進めることとする。

## 1. 東京女子師範学校保姆練習科—わが国初の保育者養成機関の設置—

### (1) 東京女子師範学校保姆練習科前史—地方からの幼稚園創設の機運の高まりと保姆見習いの派遣

日本で最初の保育者養成機関は、東京女子師範学校保姆練習科である。東京女子師範学校には、その附属園として、わが国初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園がある。同幼稚園は当時の文部大輔の田中不二麿、同師範学校摂理の田中正直、そして同師範学校英語教師の関信三と、文部省教育顧問のモルレーなどの尽力の結果として、明治9年に開設された。

東京女子師範学校附属幼稚園の初代監事には、関信三が任命された。そして主任保姆には、同師範学校で英語を教えていたドイツ人の松野クララ<sup>4</sup>が任用された。彼女はフレーベルから直々に保育を学んだといわれている。松野のほかにも、豊田美雄と近藤浜の2名が保姆として採用された。そのほかにも2名の助手もおり、松野以下計5名が同師範学校附属幼稚園の保育にあたった。幼稚園開設当日には、75名ほどの子どもが集まった。しだいに子どもの数は増加していき、その学年末には、158名（男児101名、女児57名）が在籍していた。

わが国初の幼稚園を参観した地方都市の有識者のなかには、幼稚園の教育的意義を認め、自分の都市においても、幼稚園を設けたいと考えるものが出てきた。しかし、適切な保姆を求めることは困難であった。当時の日本には松野と豊田と近藤の3名の幼稚園保姆がいるだけであったからである。

『東京女子師範学校付属幼稚園沿革大要』によれば「保姆練習科ハ幼稚園保姆ヲ養成セタメニ設ケタル課程ナリ。本校ニ於テ幼稚園ヲ設置スルヤ地方ニ於テモ亦幼稚園教育ノ必要ヲ認め本校附属幼稚園ニ模倣シ次第ニ之レガ開設ヲナスアルニ至レドモ保姆養成ノ機関ニ於テハ未ダ備ハラザリシヲ以テ本校ニ於テハ止ムヲ得ズ地方ノ請求ニ応ジ保姆見習ナルモノヲ置キ之レニ必要ナル教科ヲ与ヘ僅ニ其供給ヲ充シタレドモ時勢ノ趨向ハ到底小規模ノ設備ニ甘スル能ハザルニ至リタレバ即チ明治十一年六月二十七日ヲ以テ保姆練習科ヲ設置シタルナリ」とあり、日本初の保育者養成機関である「東京女子師範学校保姆練習科」設置の機運が、地方都市からの後押しであったと理解することができる。

同学校保姆練習科設置のきっかけには、保姆練習科設置の約半年前である同年2月より、大阪の小学校訓導であった氏原銀と木原末が府費を使って同学校附属幼稚園に「保姆見習生」として派遣された事例も見逃せない。当時、大阪府知事であった渡辺昇は、教育振興に非常な熱意を持っており、保育料を無料とする理想主義的な府立幼稚園の設立を構想していた。渡辺は、「大阪は商業地だから、子供の頃から正直といふことを叩き込まねばならぬ<sup>5</sup>」との考えから教育を重視しており、東京女子師範学校附属幼稚園を参観して、ぜひ大阪にも幼稚園が欲しいと考えたのだった。

同園ではこの2人のために、6か月間の修業期間で「実地保育」を中心に、「保育法」、「音楽」、

「幼稚園記」、「手技製作」等の講義を施した<sup>6</sup>。この2人に対する保育者養成は、同附属幼稚園の幼稚園保姆によって行われた。つまり、ドイツでフレーベル流の保育法を学んだとされる松野クララと日本人保姆第一号とされる豊田美雄と近藤浜によってである。これがわが国における保育者養成の嚆矢とされる。

「実地保育」は実際に附属幼稚園の保育に参加することを指す。現在でいう「実習」にあたる。「実地保育」終了後、講義や実技指導が行われたようである。音楽には、唱歌と和琴があった。唱歌といっても幼児のために作られたものではない。歌詞は翻訳の漢文調であったり、曲も雅楽調であった。とても保育には使えないとのことで、歌詞は豊田と近藤が手を加え、宮内庁伶人が作曲して唱歌を作ったとされる。

保育法の講義は松野クララが行ったとされる。フレーベルが考案した恩物の理解が主な内容であった。日本語が不自由であった松野の講義は、英語が堪能であった関信三が通訳にあたった。さらに、この時、松野は自身の子どもを出産したばかりで休講も多かった。氏原は「松野の講義が実にはかどらない講義であった」と、のちに述べている<sup>7</sup>。手技製作は近藤の担当であったが、これも恩物の使用法について述べるものであった。

「保姆見習生」という形で行われた、わが国最初の保育者養成教育は「実地保育」を中心として、その後に講義を行っていた。また保育理論はフレーベル主義であった。この当時、幼稚園保姆によって、恩物がいかに重要であるかを説き、恩物の使い方に熟達することに終始したといえよう<sup>8</sup>。

## (2) 東京女子師範学校保姆練習科の創設と廃止

前項でも述べたように、日本初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園の創設が、大阪をはじめとする地方都市においても幼稚園開設したいとする動きに拍車をかけるようになった。その結果、幼稚園開設に必要な幼稚園保姆の養成が求められることとなったのである。先に述べた同附属幼稚園への「保育見習生」のような計画的ではない、対処療法的な方法では、質の高い教員が得られるはずもない<sup>9</sup>。したがって、明治11年6月に、「幼稚園保姆練習科規則」が定められた。

同学校保姆練習科規則<sup>10</sup>によれば、修業年限は1か年（前期・後期の2期制）で、下の〔表1〕のような養成科目が決められていた。当時としては高度な教養を身に付けることが目指されていたように思われる。また、現在でいうところの実習である「実地保育」とフレーベルの恩物製作する「恩物用法」のコマ数が多く配分されており、同学校保姆練習科では、実習と恩物が重視されていたことがわかる。

〔表1〕東京女子師範学校保姆練習科における科目目および一週間の時数

	前期	後期
実地保育	6	6
教育論	2	
修身		2
物理学並同植物学	2	
人体論		2
幾何学	1	1
恩物用法	6	6
二十恩物大意	1	1
図画初歩	1	
園制大意	1	
古今小説		1
布列別伝		1
音楽	2	2
体操	1	1

また、学生募集は毎年9月に行うこととし、入学者の資格としては「年齢 大略二十歳以上四十歳以下ノ者」としている。さらに「心性 性行善良ノ者、身体 体質健全ノ者ニシテ種痘又ハ天然痘ヲ経タルモノ、学力 普通ノ書ヲ解シ略算術ヲ学ビエタルモノ」とし、入学試験に関しては、読書と算術について行い、合格者には直ちに入学を許可した。基礎的な学力が求められることはもちろんであろうが、やはり健康的な人物が保育者として求められていたことがわかる。

ところが、同学校保姆練習科が初回の学生募集したところ、まったく応募者がなかった。実際に授業を開講することができなかつたのである。そのため、入学試験科目を平易にすることと、学費を給与することを決定した。明治11年10月31日に「幼稚園保姆練習科生徒給費規則」を定め、明治12年4月より給費生5名、自費生6名の合計11名で授業を開始することになった。21歳から38歳までの学生が学んでいた。明治13年7月には第1回卒業生を輩出し、東京だけではなく、大阪や仙台などの地方に赴任して、その地の幼稚園教育の草分け的存在となっていった<sup>11</sup>。以下の〔表2〕に示す内容が、東京女子師範学校保姆練習科の学生の卒業後の進路である<sup>12</sup>

〔表2〕東京女子師範学校保姆練習科第1回卒業生11名

<p>田中良、相原春、勝山貞、福田布久、前原鉄、永野桂、武藤八千代、山田千代、小林利、橋本嘉治、長竹国</p> <p>相原と橋本は仙台出身、仙台師範学校女子部卒の小学校訓導で、県より派遣されての入学であった。橋本は練習科の卒業後、仙台区木町通小学校附属幼稚園保姆として昭和7年3月まで52年間在職した。相原も卒業後木町通小学校附属幼稚園保姆となったが、在職年数は不明である。</p> <p>福田は東京生まれで東京女子師範学校開校と同時に入学。小学師範科終了後引き続き保姆練習科に入学し卒業後は、東京における最初の公立幼稚園である江東小学校附属幼稚園の初代保姆となった。以後も幼稚園・小学校教育に携わる。</p> <p>山田は東京生まれで、保姆練習科を卒業後は一時高知県立女子師範学校に赴任したが、2年後に帰京。その後小石川幼稚園を伊沢修二の援助のもと開園した。</p> <p>長竹は東京生まれで、明治14年9月に前年開園したばかりの大阪愛珠幼稚園の首座保姆として赴任し、1885年まで在職した。</p> <p>原田は、練習科卒業後は横浜のブリテン女学校附属幼稚園の保姆となり、その後東京府牛込区立赤城小学校附属幼稚園に勤務していた。</p> <p>小林、勝山、前原、永野、武藤の詳細はわかっていない。</p>
--

しかし、この保姆練習科は、卒業生をわずか1回送り出しただけで廃止されてしまった。その廃止の理由は、東京女子師範学校の規則が改正されたことにある。明治13年7月に東京女子師範学校の規則が改正され「保姆練習科ヲ廃シ、幼児保育法ハ之ヲ本校ノ課程に編入ス。」となった。つまり、本科課程に「幼稚保育術」と「実地保育」の科目を加えて幼稚園保姆の免許を付与することになったため、幼稚園保姆練習科を特設する必要がなくなったのではと推察できる<sup>13</sup>。幼稚保育術においては、「実物課、玩器用法、唱歌、遊嬉、体操等ノ授方」がそれぞれ内容として設定されている<sup>14</sup>。同師範学校の本科生は、みな幼稚保育法を関連科目として履修することによって、小学校訓導となると同時に幼稚園保姆にもなれるとしたのである。当時はまだ小学校訓導の需要も満たされていなかった。にもかかわらず、小学校訓導の資格もっていないながら社会的にはまだ子守同然にみられていた幼稚園保姆になることへの抵抗があったと思われる。

## 2. 幼稚園での見習生方式による保姆養成

前項で論じたように、わが国で最初に設置された保姆の養成機関は東京女子師範学校保姆練習科である。とはいえ、保姆練習科が東京に1か所あるだけでは、全国の幼稚園保姆の需要には応えること到底できない。しかも一か年度きり、11名の卒業生を出しただけで廃止になっている。では、保姆練習科廃止以後の保育者養成はどのように行われていたのかということ、実際には幼稚園そのものが保育者養成の役割を担っていたのである。

### (1) 豊田英雄による保育者養成

東京女子師範学校附属幼稚園の保姆であった豊田英雄は、明治12年4月から翌13年5月まで鹿児島へ派遣された。わが国で二番目の幼稚園となる鹿児島女子師範学校附属幼稚園創設のために派遣されたのである<sup>15</sup>。豊田は同幼稚園で保育に携わるとともに10名の保姆見習生を置き<sup>16</sup>、『幼稚園記<sup>17</sup>』を活用して、恩物、話し方、音楽その他の保育に関する一切のことを指導した。鹿児島女子師範学校附属幼稚園保育見習科規則において保育者養成のあり方を知ることができるので、それを以下の〔表3〕に示しておく。

〔表3〕 鹿児島女子師範学校附属幼稚園保育見習科規則

(第一條より第八條まで筆者略)

#### 第九條

日課ハ五時間トシ其内三時間ヲ科内時間トシ二時ヲ科外時間トス則チ科外時間ニハ随意ニ手記ノ淨寫等或ハ日課ノ復習等ヲ為サシムルヲ以テ學科中故ラニ其課程ヲ掲ケス且土曜日ハ三時間ヲ以テ科内時間トシ一時間ヲ以テ科外時間トス但シ日課時間ハ七月一日ヨリ九月三十日マテハ午前八時ヨリ午後二時ニ至リ十月一日ヨリ六月三十日マテハ午前九時ヨリ午後三時ニ至ル

(第十條より第十二條まで筆者略)

#### 第十三條

学科ノ課程ヲ定ムルコト左ノ如シ

但シ保育見習日課表別ニ掲ケス

幼稚園教育ノ口授 一周一時間 但シ生徒ヲシテ其要義ヲ手記セシム 物理書及博物書 一周一時 但シ簡易ノ書ニ就キ其ノ概略ヲ解習セシム 園制ノ大意 一周一時 幼稚園記及ヒ其附録ニ就イテ口授ス 音楽 一周二時 彈琴唱歌ヲ授ク 恩物用法 一周六時 二十恩物ノ用法並ニ園用書法ヲ授ケ殊ニ製造品ノ貯藏スヘキモノアル□ハ検査ノ上縦覧室ニ陳列スヘシ 生理書 二周一時 簡易ノ生理書ニ就キ講習セシム 古今會話 二周一時 幼稚園適當ノ會話ヲ記憶セシメ且其話法ヲ練習セシム 体操 実地保育 一周六時 脩身書 諸物指数 此二書ノ如ハ授業時間外ヲ以テ三十分ツ、口授ス

鹿児島女子師範学校附属幼稚園保育見習科規則と、明治11年制定の東京女子師範学校保姆練習科の学科目〔表1〕における日課を比べてみると、科目数や時数などで若干の軽減はあるが、保育者養成の基本的な学科目はほぼ同様であることがわかる。鹿児島においても、文字通り実施に保育を学ぶ「実地保育」が週6時間あり、実習が重視されていたと認めることができる。さらに、放課後には幼稚園教育講義、音楽演習、恩物用法などで毎日2時間程度の授業がなされていたことになる<sup>18</sup>。

10名の見習生は5月にその課業を修了し、保姆免許状の受け、それぞれ鹿児島県の幼稚園保姆として就任した<sup>19</sup>。

### (2) 氏原銀による保育者養成

東京女子師範学校附属幼稚園に保姆見習生として派遣されていた氏原銀と木原末の帰阪と同



時に、わが国三番目となる大阪府立模範幼稚園が設立された。氏原は模範幼稚園の保姆となった。それ以来、同幼稚園は幼児教育の模範園として保姆見習生を置き、実地保育に重点を置いた幼稚園保姆の養成にあたった。明治16年に大阪府立模範幼稚園は府会の決議によって廃園となる。しかし、同園保護者の熱烈な要望と協力、ならびに府立模範幼稚園の保姆であった氏原の献身的努力によって、私立中州幼稚園として存続させた<sup>20</sup>。さらに同幼稚園は再び公立園の北区幼稚園ならびに西区幼稚園として発展的に継承された。両園においても氏原は見習生を受け入れ保育者の養成が行われた。氏原はその後、幼稚園保姆となった自分の妹である膳タケとともに、無給同様で働いていたといわれる<sup>21</sup>。両園で養成された保姆見習生はかなり多数に上っており、幼稚園での見習方式による保育者養成がこの時期いかに浸透していたかを推測することができる。氏原は自分の幼稚園には必ず保姆見習生を置き、積極的に保姆の養成を行った。北区幼稚園が開園して9年が経った明治24年2月に、翌月の3月までで同園を廃園することが北区会で決定した。氏原は幼稚園を続けられるように取り計らってもらおうと、議員の家を一軒一軒回っている<sup>22</sup>。氏原の努力は実を結び、市立西天満幼稚園が開設された。

氏原は、京阪神連合保育会雑誌のなか<sup>23</sup>でも「一保姆の試みから多くの保姆が学び合うようにすべきだ」と書いている。創造的な保育を自ら実践し、より多くの保姆たちの研究の模範となるように、氏原は尽力してきたのである。このときすでに、氏原は大阪の幼稚園の発展に欠くことのできない人物になっていたのである<sup>24</sup>。次に掲げる〔表4〕<sup>25</sup>のように、大阪では、数多くの公立幼稚園が開設された。下記のうち22園（どの園かは判別できない）は、氏原による見習生の卒業生が開設した幼稚園と言われている<sup>26</sup>。

〔表4〕大阪市における明治10～20年代の公立幼稚園の状況

名称	所在地	創立年月	首席保姆氏名	
西区	東江幼稚園	江戸堀南通二丁目	明治26年4月	山口マサ
	江戸堀幼稚園	江戸堀南通四丁目	明治26年4月	西山タケ
	鞠幼稚園	鞠中通二丁目	明治26年4月	土井コウ
	明治幼稚園	阿波座下通り / 阿波座中通二丁目	明治21年8月	岡本マサ
	広教幼稚園	薩摩堀北之町	明治24年6月	柴山タカ
	西六幼稚園	新町南通二丁目	明治25年7月	志方フサ
南区	高台幼稚園	北堀江下通四丁目	明治23年10月	井門トミ
	日吉幼稚園	南堀江上通五丁目	明治21年9月	招村アイ
	松島幼稚園	花園町	明治25年4月	田村スグレ
	本田幼稚園	本田二番丁	明治20年7月	松島シゲ
東区	桃園幼稚園	東新瓦屋町	明治22年5月	仲村 米
	金◇幼稚園	瓦屋町三番丁	明治19年1月	八田サダ
	芦池幼稚園	安堂寺橋通三丁目	明治19年1月	井村スエ
	御津幼稚園	西清水町	明治26年4月	滋賀アイ
	大宝幼稚園	大宝寺町	明治19年1月	日置 幾
	道仁幼稚園	南綿屋町	明治21年3月	柴田フミ
	相生幼稚園	難波新地四番丁	明治20年12月	(不明)
	難波幼稚園	難波字難波	明治26年10月	長光カネ
東区	南大江幼稚園	和泉町一丁目	明治26年4月	則武ハル
	中大江幼稚園	糸屋町二丁目	明治19年2月	島村 光
	北大江幼稚園	鳥町二丁目	明治19年3月	田尾マサ
	今橋幼稚園	今橋一丁目	明治24年4月	小笠原松江

	汎愛幼稚園	淡路町二丁目	明治19年7月	片岡 春
	浪華幼稚園	南久太郎町一丁目	明治19年9月	松下多計
	久宝幼稚園	久宝寺町三丁目	明治21年4月	高島カウ
	船場幼稚園	安土町三丁目	明治18年9月	浅野ミツ
	愛珠幼稚園	今橋三丁目	明治13年6月	伏見 柳
北区	相生幼稚園	相生町	明治20年3月	播磨タマ
	岩井幼稚園	空心町二丁目	明治17年11月	白石カズ
	滝川幼稚園	河内町一丁目	明治20年5月	江村ウタ
	菅南幼稚園	北花町一丁目	明治17年11月	永田アイ
	堀川幼稚園	東堀川町	明治19年3月	木村リウ
	西天満幼稚園	木幡町	明治26年4月	氏原 銀
	堂島幼稚園	堂島浜通二丁目	明治19年9月	吉岡トモ
	中之島幼稚園	中之島四丁目	明治20年4月	高橋 銀
	安治川幼稚園	安治川通南一丁目	明治19年4月	藪内 茂
			合計	

### (3) 東京女子師範学校卒業生を活用した人材ネットワークによる保育者養成－愛珠幼稚園幼児保育法伝習科

大阪府立模範幼稚園の廃園後、前項で述べた氏原銀の活躍もさることながら、大阪では公立愛珠幼稚園が、その当時東京女子師範学校附属幼稚園主事の小西新八と頻りに連絡を取り合い、保育者の獲得に努めていた。明治14年には、東京女子師範学校保姆練習科の11名の卒業生のうちのひとりである長竹国子を主任保姆として迎えている。先述したとおり、大阪は幼稚園教育の先進的な地域であった。この愛珠幼稚園は保育者養成の中核的な幼稚園としての役割を果たしていた<sup>27</sup>。同幼稚園における保育者養成は、明治15年7月に「保姆の欠員ニ備フル為ニ豫メ品行方正ナル篤志ノ婦人ヲ保姆候補者トシテ保育法ヲ伝習セシム」ことから始まった。明治19年には大阪市より正式に保姆科伝習所としての認可をとり規則を設けて保育者を養成す

〔表5〕愛珠幼稚園幼児教育法伝習科規則（明治19年1月制定）

第一章 通則
第一条 本科ハ婦女ヲシテ幼児ヲ保育スル術ヲ練習セシムルタメニ設ク
第二条 伝習生ハスベテ通学スルモノトス
第三条 伝習生ノ人員ハ六名ヲ限リトス
第二章 教則
第五条 本科伝習ノ科目ハ修身、恩物大意、恩物用法、実地保育、唱歌、体操、教育学、幼稚園管理法ノ八課トス
第六条 本科伝習ノ期限ハ概ネ六カ月トス
第七条 伝習時間ハ一日六時間一週三十五時間トス 但シ土曜日ハ五時間トス (略)
第九条 各課伝習ノ要旨左ノ如シ
一 修身ハ倫理綱常ノ大道ヲ講述シ必ズ之ヲ躬行セシム
一 恩物大意ハ物ノ性質功用ヲ説明シ務メテ其応用活動ヲ謀ル
一 恩物用法ハ恩物ノ使用ヲ講究シ手芸ニ熟練シ意匠ヲ巧緻ナラシム
一 実地保育ハ本園ノ幼児ニツキ保育ノ模範ヲ示シ各部ノ保育法ヲ練習セシム
一 唱歌ハ正雅優美ニシテ幼児ノ心情ヲ和ラグルニ足ルモノヲ撰ミ殊ニ音调ヲ整肅ニシ和洋ノ樂器ヲ用ヒテ之ヲ和セシム
一 体操ハ美容術、遊戯、徒手運動等幼児ニ適スルモノヲ授ケ且自己ノ身体ヲ健康ナラシム
一 教育学ハ教育ノ心理、三育ノ大要、ヨリ学事ノ法令等ヲ授ケ実地保育ノ基礎ヲ鞏固ナラシム
一 幼稚園管理法ハ幼稚園ノ原則及ビツノ編制、幼児ノ管理、表簿ノ編製等一園ノ管理ニ必要ナルモノヲ授ケ
第十条 本科ハ務メテ書籍ニ拘泥セズ又高尚ニ馳セズ唯実施ニ適切ナラシムルヲ要ス
第三章 入退園則
第十一条 伝習生ハ品行方正、體質健全、年令十八年以上ニシテ小学中等科以上ノ学力アル婦女ニ限ル 但シ時宜ニヨリ十八才未滿ノ者モ入園ヲ許スコトアルベシ (以下筆者略)

るようになった。当時大阪市では、幼稚園の普及をはかると同時に保育者の質的向上を図り、保育科証書または保育伝習済み証書を所持していないものは、「幼稚園保姆」ではないとして、積極的に保育者養成ならびに再教育の方策を打ち出している<sup>28</sup>。

同伝習科の内容については、規約では相当組織的な計画的な養成機関のよ

うであるが従来保母見習生を制度化しただけで、実質的には講義なされるだけでなく、教科書を示して生徒に自学自習させたようなものようである。以下に示す表5が、愛珠幼稚園幼児教育法伝習科の規則である。

ここでの伝習期限は「概ネ六ヶ月トス」とあり、伝習の科目は上記の表にあるとおり「修身、恩物大意、恩物用法、実地保育、唱歌、体育、教育学、幼稚園管理法ノ八課」であった。科目名は、東京女子師範学校保母練習科において定められていたものと類似している。実質的には講義や指導があったわけではなく、各科目に関する図書一覧表を示して生徒に自学自習させたようである。同規則第十条にもあるように「本科ハ務メテ書籍ニ拘泥セズ又高尚ニ馳セズ唯実施ニ適切ナラシムルヲ要ス」とあるように実習を重視した養成を行っていた。〔表6〕の幼児保育伝習時間表をみても、実地保育（＝実習）に多くのコマ数が割かれていることから実習が重視されていたことが明らかである。

さらに、愛珠幼稚園幼児教育法伝習科規則には、当時活用されていた図書（＝教科書）に関する資料がある【文末表】<sup>29</sup>。これをみても、恩物に関する教科書が多くみられ、この当時に恩物が重視されていたのかを理解することができる。教育学に関する教科をみると、幼稚園教育と小学校教育に関する教科書が指定されている。このことは、東京女子師範学校において小学校訓導となると同時に幼稚園保姆にもなれるとした条件の名残と思われる。『幼稚園記』はアメリカ人医師 A. ドウアイの著書（1871）“*The Kinder-garten*”を関信三が翻訳したものである。これにより日本の幼児保育界にフレーベル流の幼児教育の理論や方法が広まることとなった。また、『幼稚園（をさなごのその）』は、わが国の幼稚園教育における実際保育の方法に関する、最初の書物である<sup>30</sup>。“幼稚園”という文字を書名に使用した最初の出版物でもある。

英国人ロンジ夫妻共著を桑田親五が翻訳した。内容は、恩物のこまかい扱い方を紹介したものである。桑田は同書のなかで恩物のことを、「玩器（てあそびもの）」と訳している<sup>31</sup>。『那然小学教育論』は、アメリカ人であるチャールズ・ノルゼントの著した『教師と両親（“*The Teacher and the Parent; A Treatise upon Common-School Education; Containing Practical Suggestions to Teachers and Parents*”, 1853）を、小泉信吉らが明治10年に翻訳したものである。内容は二編で構成されており、第一編は主に教師のあるべき姿、心構え、授業の方法と内容などを含む講

〔表6〕 愛珠幼稚園幼児教育法伝習科時間表

	月	火	水	木	金	土	計
修身					0.5	0.5	0.5
恩物大意	1		1		1		3
恩物用法	1		1		1		3
実地保育	4	4	4	4	4	3	23
唱歌	1		1		1	3	3
体操					0.5	0.5	0.5
教育学	1					1	1
幼稚園管理法			1			1	1
計	6	6	6	6	6	5	35

修身、教育学、幼稚園管理法ハ伝習生勉メテ自習シ保母ハタダ其疑義ヲ講明スルモノトス



義の教師論であり、第二編は、両親に対する学校や教師への協力の要を訴える内容からなっている。基本的に開発主義の立場から書かれた本である<sup>32</sup>。

このように、愛珠幼稚園では、東京女子師範学校で専門的な教育を受けた者によって保育者養成が行われており、東京から遠くはなれた大阪においても、東京女子師範学校の影響力が大きかったことがわかる。この伝習所もしばらくして廃止され、明治21年9月には、大阪市立高等女学校に保姆伝習所が設けられることとなる。

## おわりに

保姆数は幼稚園創設当初から不足〔表7〕年度別幼稚園数・園児数・幼稚園保姆数一覧  
(文部省教育統計より抜粋)

していたのではあるが、明治20年代に入って幼稚園は急速に増加し、保姆不足が目立ってきた〔表7〕。けれども、政府は何らこれに対する方策を講じなかった。

つまり、幼稚園が創設されてから、たった1年で東京女子師範学校保姆練習科が廃止されてからも、わが国

	園数			幼児数	幼稚園保姆数
	総計	公立 (うち官立)	私立		
明治9	1	1 (1)	0		
明治13	5	4 (1)	1	426	16
明治16	12	5 (1)	7	554	32
明治18	30	22 (1)	8	1,893	62
明治19	38	27 (1)	11	2,585	83
明治21	91	73 (1)	18	6,337	215
明治23	138	99 (1)	39	7,486	271

では、幼稚園現場での「見習生方式」という、便宜的な保育者養成が行われていたと解釈できる。

このようにみえてくると、日本人保姆第一号として活躍した豊田英雄や、氏原銀といった幼稚園草創期の保育者たちは、懸命に保育者養成に情熱を燃やしていた印象を受ける。国家としての保育者養成制度は整っていなかったが、日本の幼児教育を支えなければならないという使命感に駆られて、東京女子師範学校保姆練習科の関係者である彼女たちは、保育者として活躍し、そして保育者養成を懸命に行っていたことがわかる。氏原に至っては、幼稚園保姆の社会的地位も待遇も低かった時代に、小学校訓導の地位を捨てて幼稚園保姆になる者として活動を行っていた。氏原の尽力により大阪では見習方式によって多くの幼稚園保姆が輩出され、公立幼稚園が発展していった。

保育者の需要に応じるためには、幼稚園で保姆見習生をおき、半年ないし一年間の見習い期間で保育者養成を行っていた。養成の内容をみると、わずか1か年しか存在しなかった東京女子師範学校保姆練習科の規則や学科目が、鹿児島においても大阪においても大いに参考にされていることも明らかとなった。その結果として、「実習」と「恩物」が保育者養成の要とされていることも明らかとなった。現在においても、保育者養成機関においては、「実習」が重視されている。この観点から鑑みても、保育者養成において、実習はとても重要な要素であると確認することができた。

本研究の今後の課題として、どのような人物が保姆見習として幼稚園に所属し、その後のキャリアをどのように築いていったのかを明らかにしたい。たしかに、これまでに論じてきた豊田

や氏原の頑張りは理解できたのであるが、彼女らの保育者養成の技量や効果がどのようなものであったのかを、幼稚園における保姆見習制度の具体的な方法や指導者や見習生の心情の側面から検討していきたい。

## 【註】

- 1 ここという保育者とは、幼児教育の専門職の事を指す。現在でいう、幼稚園教諭、保育士、および認定こども園における保育教諭のことをさす。本稿では、幼稚園保姆（＝現在の幼稚園教諭）に絞って検討を行う。
- 2 しかも、この当時は現在の保育所（＝戦前までの託児所）で働く保育士（＝戦前までの託児所保姆と呼ばれていたもの）の養成は行われていなかった。佐野友恵（2013）「戦前日本における託児所保姆の養成・資格・待遇—幼稚園保姆との比較を中心に—」『保育学研究』第51巻第1号、pp.26-35。
- 3 水野浩志（1983）「戦前の保育者養成の歴史」『世界の幼児教育』第2巻、日本らいぶらり、347ページ。
- 4 松野クララは、結婚前はクララ・チーテルマンといい、農務省の役人の松野礪の夫人となった。
- 5 膳まき子（1926）「大阪市に於ける幼稚園の沿革」『幼児の教育』第26巻、92ページ。
- 6 氏原銀と木原末の東京女子師範学校附属幼稚園への保姆見習としての受け入れの顛末については、前村晃（2007）「豊田英雄の草創期の幼稚園教育に関する研究（1）：豊田英雄の「代紳録 全」と氏原の「幼稚園方法」との関係」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』12（1）、35-51に詳しい。
- 7 竹村一（1960）『幼稚園教育と健康教育』ひかりのくに、135ページ。
- 8 守随香（1995）「保育実践のバイオニア：氏原銀」（1）『幼児の教育』、43～44ページ。
- 9 小川正道（1966）『世界の幼児教育—歴史・思想・施設—』明治図書、170ページ。
- 10 東京女子高等師範学校編（1981）『東京女子高等師範学校六十年史』（日本教育史文献集成1）、第一書房、38～39ページ。
- 11 立浪澄子（1994）「東京女子師範学校保姆練習科第1回卒業生たちのゆくえ」『日本保育学会大会研究論文集』12～13ページ。
- 12 『昭和31年 みどり会名簿』より抜粋。みどり会は、保姆練習科・保育実習科・幼稚園教員臨時養成課程の出身者で「みどり会」が組織され、その名簿が発行されているが、その出身者は全国各地の幼稚園で活動し、わが国幼児教育百年の歴史のなかで、重要な役割を果たした（『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会（1984）『お茶の水女子大学百年史（テキスト版）』）。
- 13 大岡紀理子（2009）「近代日本にける幼稚園制度と保姆養成制度の成立過程」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊17号—1、184ページ。
- 14 東京女子師範学校（明治12-13）『東京女子師範学校年報第6』21ページ。
- 15 高橋清賀子ら（1998）「豊田英雄（ふゆ）の研究（その5）：本邦二番目の公立幼稚園（鹿児島女子師範付属）出向のいきさつとその経過」『日本保育学会大会研究論文集』（51）、（pp.346-347）。
- 16 清水陽子（2006）「鹿児島女子師範学校附属幼稚園開設期の一考察」『保育学研究』第44巻第2号、118ページ。

ジ。

- 17 明治9年1月に刊行された桑田親五訳『幼稚園（をさなごのその）』と、明治9年7月に刊行された関信三訳『幼稚園記』が幼稚園保姆にとっての幼児教育に関するわずかな頼りとなる書とされた。
- 18 前村晃（2007）「豊田美雄と草創期の幼稚園教育に関する研究（2）－鹿児島女子師範学校附属幼稚園の設立と園の概要－」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第12巻第1号、67～68ページ。
- 19 前村（前掲書、67ページ）の研究によれば、「豊田が着任した時点の見習科の生徒数は10名とあるが、実際には7名になった模様であり、一年度の修業者は6名との記述（『文部省年報（明治13年）』）もある。また、『文部省年報（明治12年）』によると、鹿児島では、明治12年5月には、本科生から2名を選び、保姆伝習のため東京女子師範学校に留学させている。」
- 20 日本保育学会共同研究小委員会（1961）「日本幼児教育史の研究」『幼児の教育』第60巻第10号、日本幼稚園協会、66ページ。
- 21 倉橋惣三・新庄よしこ（1956）『日本幼稚園史』、フレーベル館、140ページ。
- 22 竹村一（1960）『幼稚園教育と健康教育』ひかりのくに、166ページ。
- 23 『京阪神連合保育会雑誌』（1908）I第6号、49ページ。
- 24 守随香、前掲書、50ページ。
- 25 日本保育学会共同研究小委員会（1961）、前掲書、66～67ページ。
- 26 同上。
- 27 田中友恵（2003）「愛珠幼稚園における保姆養成」『日本保育学会大会発表論文集』56、172ページ。
- 28 日本保育学会共同研究小委員会（1962）「日本幼児教育史の研究」『幼児の教育』第61巻第8号、日本幼稚園協会、57ページ。

29 【文末表】愛珠幼稚園幼児教育法伝習科図書一覧（※読みやすいように一部筆者改）

科目名	書名	巻冊記号	出版年月	著者	出版社
修身	日本品行論	上下 二冊	明治12年11月	荒野文雄	東京府寄留 荒野文雄
恩物大意	恩物大意	全一冊	写本	東京女師講述	
恩物用法	幼稚園恩物用法	十二	明治11年11月	東京女師附属 幼稚園製造 加藤錦子選	同左
	幼稚園玩器学本	四	明治16年4月	小石川小日向 水道町82 加藤清人	
唱歌	小学唱歌集	初編ヨリ三編ニ ワタル三冊	明治14年11月 明治16年6月 明治17年6月	文部省音楽取調 係	同左
	唱歌	四冊	写本	東京女師選	

教育学	幼稚園記	四巻	明治9年7月	関信三訳	東京女子師
	幼稚園	三巻	明治9年1月 明治10年7月 明治11年6月	桑田親五訳	文部省
	那然小学教育論	全一卷	明治18年3月	小泉信吉 四谷 純三郎訳	文部省
	教育	二巻	明治18年6月	高嶺秀夫訳	本郷区湯島四丁目14 茗溪会
学校管理法	学校管理法	全一冊	明治18年3月 第4版	伊沢修二 著	小石川区小日向 台町3丁目20 森豊造
	幼稚園創立法	文部省教育雑誌 第84号処載	明治11年12月	関信三 述	文部省
<p>※表中完全ナラザル図書アレドモ姑ク之ヲ仮用シ適當ノ書ヲ得ルニ從ヒテ改定スベシ 幼稚園管理法ノ部ハ本科ニ適切ナル部分ノミヲ撰択シテ之ヲ用フ</p> <p style="text-align: right;">大阪府東区第九学区 公立愛珠幼稚園</p>					

30 <http://www.tamagawa.ac.jp/museum/archive/2010/227.html> (2015/09/27)

31 <http://www.tamagawa.ac.jp/museum/archive/1990/005.html> (2015/09/27)

32 石附実 (1989) 「翻訳教育書『那然 小学教育論』の一考察」『キリスト教社会問題研究』同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、37、696 ページ。